

朔風 (きたかぜ)

宋世何

「お叔父さん、お祖母様^{おばあ}が早く起きて御飯食べなさいって」と、
齡年八歳になる姪の貞順にゆり起されて私は目が醒めた。同じ部屋
に寝ていた筈の父の姿は見えない。田圃の見回りでもしているのだ
ろう。私は窓を開け外の空気を吸った。七月半ばの陽気は朝から暑
かった。太陽の顔は赤ぼく、向い側の山巒には靄がかかり、淀んだ
空気は、今日の暑さかと思いやられた。私は昨日の夕方帰って来たば
かりである。私はT市の公立高等普通(中学)を退学させられ、下
宿でごろごろしながら、自分の身の振り方を考えているうちに、兄
から手紙が来て「お前の話は学校から通知があつて知っている。そ
んなところで間違間違せずと直ぐ帰れ」というので、今年こそは夏
休みになつても家へ帰らないつもりだったが、仕方がなかった。更
に、兄の文面は「この分で行くと今年の收穫は覚束ない。というの
は、雨が降らず稲は枯死寸前で、お前の学資を続ける訳にもいかな
いだらうと思つていたところ、幸いにもお前が学校を退学させら
れ、実はほつとしたところだ」と書いてあつた。私は内心腹が立つ
た。兄は貧しい家計から学資を出すのを始めから反対であることは

知っていたが、今更ながら、その文句が気に入らなかつた。私は一
層のこと、このまま出奔しようかとも考えたが、どうにもならな
い。先たつものが工面ができなかつたのである、どうせ出奔するな
ら、国内という訳にもゆかず、満州かシベリヤか日本である。私の
才覚では到底及ばぬことだつた。いくら考えても堂々回りをするだ
けである。仕方なく荷物を纏めて下宿を去つた。

私の学校は朝鮮人と日本人が共学していた。私が四年生になつた
時に、旧制が新制に学校令が代わり、今まで四年卒業が五年卒業と
いうことになった。先生方の数も増え校長も替つた。十四、五人も
いる教諭の中には、朝鮮人は白講師と林教諭の二人だけだつた、白
先生はわれわれに週二時間位の漢文を教え、白髪^{はく}の氣骨ある老人
で、何時も白衣をまとい、風格のある人物であつた。これに引きか
え林教諭は学校当局に阿諛これ務め、何時も林の如く靡き、己れの
に地位保持に汲々としていた。頭腦空白で、大部分の学生達には馬
鹿にされたが、出来損いの有力者の子弟にはよく面倒を見ていた。校
長が交代してから新学期が始まり、各々希望により、旧制と新制の

組に分けられ(四年生に限り)新制だけは別に教材を整え学習が始まった。共学とはいっても、朝鮮人に較べれば日本人子弟は、その数が五分の一にも充たなかった。学期始めは何事もなく過ぎた。そのうちに新校長と教頭は地金を頭出し始めた、放課後日本人学生を学級を問わず教室に集め、入口には見張りを立て特殊教育を始めたのである。最初のうちはわれわれも実状を知らなかったが、段々と噂が漏れ始めた。「諸君は朝鮮が植民地であることを認識して日本人の誇りをもって臨め」とか「朝鮮人と付き合ってはいけない」とか、何事によらず、彼等は彼等らしく植民地教育を始めた。とりもなおさず彼等は、侵略の前駆者であり、事実朝鮮から文化と言語までも奪い去ろうとした尖兵だったのである、この事実を一人が知り、二人が知り、二人が語らい、それが三人となり、事実は全学級に伝播され暴露された。われわれは同盟休校を決意し、一九二〇年五月末、三年生の一部と四年生全部(日本人を除いて)が校長排斥に起ち上った。狼狽した学校当局は、各担任教諭を主体に、生徒達の家庭や下宿を訪ね個別的に学校復帰を説得した、その中で林教諭の働きは目覚しく、彼は学校に最大の忠誠を尽した。お陰で未経験なわれわれは、同盟休校三日目にして完全な敗北を喫したのである。あとは処分決定となり、三名の退学処分と二名の停学処分では終ったのである。

どだい、私の家の経済事情からいって、私が学業を続けてゆくことが如何に困難であつたかは百も承知のことである、しかし、当時一九一九年三月一日の独立万歳事件を契機として、民族、思想両面からの抵抗運動は澎湃として起り、われら青少年の間にも多大な影響を与え、そして過去への反省と向学の熱が燃えさかった事情を多

少説明せねばなるまい。まず、一九二〇年代迄のこの地方の教育施設は、書堂の存在が大きな役割を保持していた。日本の政治になつてから、この国の教育制度は根底から顛覆され、郡には普通学校(小学)、道には高等普通学校(中学)が出来た。(その他私学や特殊学校もあったが)彼等は教育することによって朝鮮人を懐柔せねばならなかった。だが、両班階級(上層)を包摂した書堂の抵抗は相当なものであつた。

書堂では何を教えたか。李朝五百年の始祖李成桂以来、高麗からの仏教は山へ追いやりられ、儒教(朱子学)がその代りに取り入れられて、朱子家礼、修身齊家、立身揚名が民族の思想生活を支配してきた。派閥や勢道政治が横行し、学問が科学とはならず、独善と信仰と道徳となり、朱子学(儒教)以外のものはすべて雑書として排斥され、儒生たちは「勿觀雜書」を叫び、国民の自由な思考まで封殺して、一部異端の儒生たちの間にその雑書を読み論議することさえ迫害された。そこには当然虚礼虚飾の形式主義と事大主義だけが残された。このような弱勢をもって、近代資本主義の強大な侵略には抗すべくもなく、この社会は脆くも崩れ去つたのである、それでも尚、一部地主両班階級は頑固に旧弊を固執して子弟を書堂へ追いやつた。書堂では、先生が朝まず個人別による一定の課程を教え、生徒は自分の座に戻つてそれを一日中朗誦する。翌る日生徒は先生の前に出て書物を閉じてそれを暗誦する。暗誦ができなければ先へは進ませないのである。

このようなやり方は、生徒に経文以上の退屈を忍ばせた。彼等は思いきり羽根をのばしたいのである。

私の村から一里ばかりのところにE町(邑)がある。そこに普通

学校が設立されてから三年目になった。一九一六年のことである。二月の或る日のことであつた。午後の陽差しが書堂の窓を照らすころ、一人の男があたふたと飛び込んできて先生に何か注進をした。

見れば上手の村落の金参奉宅の作男朴総角(結婚していない男)であつた。姓は朴というが名前を呼んだことがないので本当の名前を知る者はいなかったのではなからうか。年はとうに三十を越し、まだ総髪を束ねて後ろに垂らしており、皺深い眦は彼の前歴を物語るようでもあつた。この書堂への注進も彼の才覚だけではなさそうに見受けられた。先生はみるみる狼狽の色をなし、声を大にして皆の朗誦をやめさせた。銘々勝手にはいりあげた蛙鳴蟬噪もびたりと止んだ。「学校軍が生徒募集にやつてきたから皆は本を早く片づけて適当に待避せよ」というのであつた、生徒達は自分勝手な避難の場所に向つて、或は裏山、或は竹藪目指して蜘蛛の子を散らす如く姿を消した。蜘蛛の如く散つていった連中の中には妻帯者もいれば、兎に角私よりは年配者の三十名余りの集団であつた。私は取り残され、何かの恐怖を感じたが、その恐怖が何であるかわからない。私は上手に当る私の村落へ向つて歩を進めた、麓の角まで来た時、上手から下手へ向つて学校生徒の示威行列が行進していた。五十名余りの人数であつたらうか。服装はまちまちだが、前と後ろには黒い服と金筋の帽子と佩剣が夕日を浴びてきらきら光っているのが目立っていた。行列の前には五、六名の人がそれぞれ楽器を持ち、奏でる曲は軍隊の進軍ラップであつた。行進は北から東の村道をとっていったが、村人達は誰一人それを眺める者はなく、方々から犬だけが吠え立てていた。私は落ちつきをとり戻し、わが家への道をと、村道との岐れ路のところまできて立ち止まった。私からは恐怖は去

つていた。行進は私の近くまで来て止まり、前にいた黒い金筋の帽子に黒い詰襟の洋服に佩剣をした年配の男が、私のところまで進みで、「私はE町普通学校の蘇訓導だ。君はこの村の人かね?」ときいた。私は「そうです」と答えた。「書堂へは行っているかね」「行っています」「姓名は?」「金奉鉉と申します」「はは……両班ではないか」私は「両班は両班でも金のない両班です」と答えた。「そんなことは問題ではない。これからは君達の世の中だ、世の中は激動している。この時代の波を乗り切るには書堂なんかには燃ぶつてはならない。学校へゆき苦学でも独学でもよいから新知識を吸収しなければならぬ。あまり話が手間とつたのでもなかったが、蘇訓導と私の話のやりとりを監視するつもりか、後ろの方からもう一人の訓導が前の方へやつてきた。様子から見て日本人らしかった、彼は蘇訓導に二言三言何かいった。蘇訓導は先の話の続きをへし折り「君は学校へ行きたくないかね」「行きたくても私の一存ではどうにもなりません」「お父さんの許可があれば異存ないんだね」「そうです」「お父さんのお名前は」「金冒奎です」「よろしい、では二、三日後に逢おう」といって、隊列を整えて示威行進は去つていった。私は気分爽快なるを感じた。蘇訓導の私に対する態度も懇切だが、第一に自分のプライドを失なかつたことである、己れのやりたいと欲する鬱積した意思を、たとえ誘導されたとはいえ臆面もなく発表したこと、幼いながらも憚ることなく相手と渡り会つたことが嬉しくてならなかった。退嬰と沈滞と無気力と一人よがりとかきめとの書堂と私は別れるのだ。書堂よ、さよなら。それを思うと私は、無性に躍りあがる気持だった、私はそのまま家へは戻らず、裏山の松林に潜り時間をつぶした。何故なら、家の人か村の人が、私

と蘇訓導とのやりとりを見ていたなら、事が面倒になるので、成るだけ時間を稼ごうと思ったからである。夕飯時すれすれに家へ帰ったが、学校軍の示威行進は知っていても、私のことについては誰も知らなかった。私は殊勝な顔をした。勿論その話には触れもしなかった。

三日ばかり経った。昼下り、私は作男に迎えられ書堂から家へ帰った。蘇訓導がきていて、縁側に腰かけて父と私のことについて話をしている。私は端の方に坐ってそれをきいた。父は頑固に私を学校へやることを拒んだ。学校へ子供をやる子供が駄目になるというのである。どだい、学校へ行っているのは常民(平民)の子ばかりではないか。両班の子がそんな連中と一緒に勉強して、朱子家孔、修身齊家、がなるか、ともいった。そうかといって、父に夢よりも一度の希望があったとも思われない。滅亡した李朝五百年と、日本の侵略に対する最後の挽歌ではなかったか、蘇訓導は根気よく執拗に喰いさがつた。両班とか常民とか、既に区別が無くなったこと、李朝は滅び、それも両班が減ばしたこと、時代は封建から、商業、産業資本に移り、日本はいち早く西欧先進の頭脳をとり入れ、経済力をもって武装し朝鮮を侵略したこと。われわれはこれらと戦い、生きてゆくためにも、新知識を吸収し、彼等より一層勉強して、旧弊を捨て新學問に傾注せねばならぬこと等々、諄々と説いても父は承諾の言葉を濁した。延々三時間に及んだが、蘇訓導は自信があるらしく、最後にこういった。「如何でしょうか、これは御子息のためであるから、御子息の意見をきいて見て、御子息がよろしいというなら、私の学校に預けてくださいますか」と。父は半信半疑ではあったが、まさか自分の息子が自分を裏切ることとはあ

忙がしく立ち働く姿を見た。足長蜂は自分より大きい虫を子供を産むために運ぶことができ、蟻の中にも種類が幾つもあることを知った。私はいつかまどろみ始めた。目が醒めた時には太陽はもう中天にあつて、今朝の露はすっかり消えていた。暑かった。私は退屈まぎれに、わが家の命の綱である田圃の出来具合を見察すべく思い立った。田圃は川べりにもあり、やや高台にもあつて、うろ覚えながら知っていた。中天から注ぐ太陽の直射と、田圃からの照り返しの熱気の中を野原に向って歩いたが、目眩と胸づまりを感じ、いまに倒れそうな氣もした。前後左右どちらを向いても、自他を問わず、田圃は一樣に潤れている。地面は粘土質なせいか丁寧に地割れしており、また時季が早いので穂先は見えないが、稲の葉は昆布巻のようによれてびーんと立ち、葉先はおしなべて黄色く、枯死寸前の姿であった。それでも私はわが田圃へと進んだ。こも同様。氣のせいか、よそよりひどいようにも思われた。私はがっかりした。何たる惨憺たる光景であろうか。何時雨が降り、穂が出て稲が実り、収穫があるだろうか。私はいっぺんに全身の力が抜け、べたんと田に坐りこんでしまった。

夜になった。一家揃って夕飯をすました。嫂はあとかたづけを終り、子供達をつれて自分の部屋に引込み、父、母、兄、私と四人が銘々の姿勢で縁側に座っていた。小麦殻を燃す蚊やりの煙りは、猛烈に喉を刺激するが、一向に効き目があるとは考えられない。この情景は昨夜ある筈だったのに、私が相当な距離を炎天の下を歩いて帰ったので、疲れて早く寝てしまったからであつた、私は終始黙って何事もいわず、父や兄も私のことには触れようとしなかった。父は思い出したように天気のことや収穫のことを、兄を相手に心配し

るまいと、たかをくくったか「よろしいでしょう」といった。蘇訓導が、三日前に私が約束したことを、いまのいままで黙っていたことに私は感謝した。いま私は運命が決まろうとしている、勇気をださねばならない。私は坐っていた体をおこして父に向つて真直ぐ立ち、「学校へ行きます。実は、三日前に先生と約束しました。学校へやらしてください」と、はっきりいった。一瞬、父の顔色は青褪め、暫く沈黙が続いたが、やがて眸をそらした。そして断髪しない条件で承諾を与え、蘇先生は二、三の注意事項と打合せを父と済ませ帰っていった。その晩父は私に口も訊かなかったが、それはそれで終った。私はこうして学校へ行くことになった、蘇先生にはその後も普通学校を卒えるまで随分とお世話になったのである。私が学校へ行つて見たら、三十を越した親父もいれば、十一、二の子供まで入り交つて、チョンマゲ給髪など色とりどりである。それから間もなく断髪させられた。このため悶着も起きた、これより前一九九六年一月一日に政府の断髪令は下つたが、誰もがそれを無視した。李朝政府の無能と裏で使喚する日本の侵略に対する抵抗であつたともいえるだろう。一九二〇年代以後まで、この風潮は民間に滲みこんで、その後も永いこと続いた。しかし時の流れと共に、一部農山村を除いて段々とこの風潮も消えていった、中でも一番哀れをとどめたのは書堂である。私が普通学校を卒える頃には、書堂はその姿をこの地方から消した。

私は遅い朝食をすました。家の周りや松林の窪地にある畑を見回したが、そこに作られた作物は、見るも無残にうち萎れていた。私は家へ戻り横手にある粗末な四阿に入つた。そこには、竹を編んで中段に棚が吊つてあつた。私はそこに寝そべり、足長蜂や蟻などの

ていた。母は話の間隙を縫つては、私に下宿生活や日常茶飯事について、こまごまと聞きだそうとする。私は面倒になり、聞いていない振りをしてみたり、或いはそうだとか、そうでないとか、符合が会えばうんとかいつて相槌をうち、簡単な返事に代えた、父や兄はこれを苦々しく思ったに違いない。だから学校なんかへやるんじやなかった、現にこの子は生意氣になつてゐるではないか、と。私は蒸し蒸しする空気に体はべとつき、蚊やりの煙りに喉がからからとなつて、外の空気が吸いたくなつた。村落の中間程に大きな櫟の木が立っている。樹齡三百年にもなろうか、枝はたわなに茂り、屋であれ夜であれ、恰好な涼み場所である。今夜も村人は多勢集つて何かの話に花を咲かせているだろう。私は思い出して立ち上り履物を履いた。氣づいた兄は「何処へ行くんだ」といった。「村の櫟の木のところまで行つてきます」と答えた。「そんなところへ何しに行くんだ」「涼みに行きます」「そんなところはお前が行つて遊ぶところじゃない、早く帰るんだ」「早く帰らねばならぬ理由でもあるんですか」「何をッ! この馬鹿者め!!」の声を後ろに聞きながら私は外に出た。兄の不要な私の干渉は、俺達は両班だという意味合であろう。櫟の木の下には多勢の人がいて、私の顔を知っている人達は「坊っちゃん、何時帰りましたか」と挨拶してくれた。私は昨夕帰つて来たことや早魃で大変だなどのことを簡単に話して、彼等の仲間入りをして墓座の上に坐り込んだ。話題はきまつて天気のこと、降雨のことが主であり、村外れの崔書房が、家族共々三日も何も食わずに寝ている話も飛び出した。春の新芽の出る頃なら草を喰う手もあるが、この早魃に干しあがつた草は牛馬だって横を向く。糧食が断えて、地主の金参奉のところへ行き、小作米の前借を申入

れたところ、再三に亘りそんなことでは困る、お前は怠け者だから
そうなるんだ、俺は慈善家ではない、絶対に相成らぬ、といって断
わったそうである。一体、怠けるというが、この土地で、この村で
何が出来、何を働けばよいのだ。始めは松の木を皮を剥いて食べた
という噂だが、それも力が尽きて寝こんでしまったという。体全体
に浮腫みがきていたとも聞いた。これを聞いた皆はシュンとした。
初耳だといわんばかりの人もいたが、実際は知っていた。彼等だ
もならないことなので、黙っていた人達もいたに違いない。彼等だ
って糧食を分け合う余裕があるわけなし、崔書房の境遇の寸前に
あるといつても過言ではなかった。しかし、彼等は意見を出した。
一握りの麦でも皆で出し合って助けてやろうというのと、成老人に
頼んで金参奉に掛け合せて貰おうというのとである、意見が二つ出
ると、なかなか纏まりがつかなかったが、最後に成老人が、皆の意
見は二つ共立派だから、二つ共実行しましょうといった。取り敢え
ず、事は急だから一握りの方からまずはじめ、その間に金参奉に交
渉しようというのである。皆に異存がある筈がなかった。私は目頭
が熱くなる思いがした、何と悲惨な残酷な事実であろうか。

私は幼い時に家の人の目を盗んで、よく成老人の民話をきかされ
たものだが、今夜私は密かにそれを期待したけれど、せがむのをや
めた。遠く山の上に火が見えたので、あれは何かと成老人にきいた
ら、あれは雨乞いの松明の烽火だといった。方々でこのような行事
は行われているらしい。五百メートルばかり離れたところに灯火が
見えたので、ついでに、あれも何かと問えば、田圃の水汲みだとい
う。川に水があるの？ といったら、あるかないかは行つて見た方
が一番よい、ひどいもんですぜ、といった。私は暗い路をそこへ向

よく働いた人である。そのためか私は父を冷たくさえ感じていた。
母はといえば、ありきたりの人で、子供達にさへ頭が上がらない人
である。父にも柔順で忠実な人であった。嫂とは滅多に話をしたこ
ともないので、どんな性質の人か私は知らない。私達はこのような
家族構成であった。私はこの家から去ろうと思う。去らねばならな
い。しかし、去ろうとしても皆が反対するであろう（事実その秋の
始めに、この話を切りだして反対された）。ではどうしろというの
だろうか。私を結婚させ、三町歩足らずの瘦せ田圃を一部分け与え
て、定着させる魂胆だろう。兄は一応私の出奔を反対はしたもの
の、いづれその時が来れば長男の権利を主張するにちがいない。い
やなことである。

私の里（村）は戸数にして二百五十に充たぬ村で、三十、五十と
聚落が別れており、一つの聚落には必ずといってよい程一人の大地
主が住んでいた。年間粗何千石から何百石までの収入を持ち、土地
という土地はみんな彼等が独占していた、自分の土地を持って百姓
をしている者は極く稀れで、他は土地は無論のこと、家も持ってい
る者もない。与えられた家に住み、与えられた土地を耕やし、法
外な小作料を納め、農奴と渾らぬ生活をしている。私の住む聚落を
例にとっても、秋の穫り入れが畢り、小作料を納めたら、収穫は幾
許も残らず、翌年の秋口まで堪えられる人は二、三軒を数えるだけ
で、他は絶糧農家が殆んどである。彼等には副業や技能もなく、出
稼ぎをしようにたつて仕事があるわけでもない。煮焚きの燃料もない
ので、遠く近くの山々の盗伐を始め、草まで刈り取って、きれいに
熊手で攫ってくる。山は荒れ放題なのである。万止むを得ずという
ところであろうか。そこに何が育くみ、何の生氣が発生するという

って行った。成程これはひどい。灯火の下で四、五名の人が坐り込
んで煙管で煙草を吸っている。川は一応堰き止めてはあるが、川床
に水はなく、川と用水溝との境を深く掘り下げ、水の溜まるのを待
っているのである。どの位待ったか、小半時は経つたろうか、二人
の男が溜の中に入り、四角い木桶で水を汲み、それを持ち上げて上
にいる人に渡す。上におる人はそれを受取り用水溝に空ける。五、
六杯汲むと水は涸れてしまう。用水溝に空けた水は、二百メートル
も三百メートルも先の田圃に届きそうもなかった。用水溝がみんな
吸ってしまったのだ。だが、用水溝が濡れ、汲み上げた水が田圃に届
きさえすれば、むなししい望みに托して、一と晩中それをつづけるの
である。それも水場から近い人の話であって、遠い人はとうに諦め
てしまっているのだ。だから水争いもない。

翌の日から私は四阿に入りびたつた。これといつてやることもな
い。家族達とは全然別個な存在になつてしまつた。何となしに時代
的亀裂も感じ、社会的、家族的不満が募り、やがて父や兄を相手に
爆発しそうな氣もする。そんなことではいけないことだから、務め
て避けなければならぬ。彼等に新時代の洗礼を受けろというの
も、いま急に金を産み出せといったところで無理な話である、だか
ら鬱積した私の不満は内攻するばかりであつた。時たま兄と私は衝
突をする。これという事件があつたことではなく、言葉尻や使う
言語の相違のためである。察するに兄は僻んでいるのかも知れな
い。私のために家計が傾むいたとも考え、自分は永いこと書堂で漢
字は習ったがいまの時勢に何の役にもたない。それかといつて立
派に百姓ができるわけでもなく、私との差はひらくばかりで、内心
いらいらしているのだろうか。父は厳格な人で、自分にも厳しく、

のか。退嬰と諦めと絶望だけが糸を引いていた。

雨は今日も明日も翌々日も降らなかつた。それから四日ばかり経
ち、私は例の通り四阿で寝そべって、本を読んでいたが、照り返し
が強く、汗はじくじく流れて、湿氣を含んだ空気は何か異様さを感じ
た。私は疲れて本を捨て目をとめてつぶつてみた、午後も早や
二時を過ぎていた。一陣の涼風が私の頬をなでたので、私はふと目
を開けた。遙か彼方東南方に、大きな竜巻が舞い上り、雨足を伴な
つて北方に向い、猛烈な速度で馳けてきた。距離は測定し難いが、
この地方の常として、海に発生したものが陸地に上陸したものとし
れば、五里位はあろう、竜巻は急に速度が弱まり、聳え立つ紫紺色
の山脈に遮ぎられて、そそりたつ巻柱は雲と化し、みるみるうちに
わが村の上空を覆つた。上空を覆つた雲は西陽を隠し、空一面は暗
黒一色に彩どられ、物凄い雷の鳴動と共に日蝕を思わせるような異
変を感じさせた。やがて大粒の雨がパラッ、パラッと降ってきたか
と思うと、間髪を入れず土砂降りとなり、雨は沛然と降り注いだ。
この間約一時間足らずである。村人達は慌てた。雨具など揃える暇
もなく、鎌を担いで自分達の田圃の畔に向つて駆けて行つた。早天
の慈雨とはこのことか。びしょ濡れも寧ろ嬉しく、あちこちと駆け
廻ぐつていた。私は四阿で雨繁吹を浴び、気温の急低下で寒気すら
感じた。それでも私は、安全な屋根の下で降り注ぐ雨足を見つめて
いるのが心地よく、そこを立ち去らなかつた。私は雨繁吹を避けて
四阿の真ん中に陣どり、考えるともなしに或る安易感に襲われた。
若し勇氣があり、自分の土地に愛着があり、誠実であつたら、私
はこの雷と雨にもめげず、鎌を担いで畔目掛けて飛んでいった筈で
ある。にも拘らず私は、自分だけは屋根の下で濡れもせず、ひよ子

が親鷄の羽根の下で甘える如く、四阿の中に縮こまって、人々の難儀や労苦を遠くで眺めるだけで、それを助けようともせず、共に苦勞をしようともしない。このひ弱な無氣力と消極性がこれから私を苛むかも知れない。

あれだけ降っていた雨も、僅か一時間足らずで雲が切れる如く引いて行った。降雨量としては相当なものだが、乾き切った土地に短時間強く降った雨が滲み込むわけもなく、上っ面の泥を洗い浚って行ったに過ぎなかった。どうしても降雨量は不足なのである。雲は幾分残っていたが、青空が見え始めていた。その晩父も雨不足を訴え、聚落の櫛の木の下に集まった人々も同じことをいっていた。しかし夕方見え始めた青空も、晩になって曇りとなり、空は漆黒の暗であった、この分では望みなきにあらずと、成老人がいつていた。

翌々日は曇り。珍らしく凌ぎよい日である。その翌日も曇りの天気である、午後から厚い雲が出始めた。雲は黒く層が厚かった。この分なら大丈夫じゃわいと、人々は忙がしく身を動かし、畔の整備に取り掛かった。案に相違なくその晩宵の口から雨は降りはじめた。敲きつけるような雨音は、中庭といわず樹の枝といわず、一と晩中音が止まなかった。私が翌日目が醒めた時には、まだ篠つく雨が降り続いていた。あの涸れ果てた川は氾濫寸前である。父は川向うの田圃のことを心配していたが、気にしたところで川を渡るわけにもいかず、また渡ったところで仕方がなかった。この川は北東の山の分水嶺の谷間から発し、西南に流れて大川という川と合流する。大雨があるたびに川は氾濫し、少し高台にある田圃を削りつけて崖をつくり、低いところには泥や砂礫を運んで台地をつくる。だから水路はいつも変貌するのだ。風は止んだが雨は昼になっても止

まず、川は氾濫し始めた。黄色い泥水は堤防を越え村の前の田圃を襲って来る。そのうちに堤防は欠壊し、田圃は湖と化した。川まで行くすべもないが、私は雨具をつけ、路を遠回りして丘の出っ張りまで行った。そこからは谷子がよくわかるのだった。本流の方は濁水が凄まじい勢いで激流し、材木、薪木、藁、礫、器など、たまには鷄や子豚も混って浮きつ沈みつ、流れに吞まれていた。分水嶺の谷間には集中豪雨が襲って来て、家畜や家財を管理する隙もなかったに違いなかった。

午後になってから幾分雨は小降りになり、一時にどつと流れた雨水は、禿山を洗い滞りなく水は漸次引いていった。天気は翌日の午前中に晴れ上がった。村の人々は忙しくなった。水が完全に引くまで待つてもおれず、まず最初に堤防から手をつけねばならない。みんなは夢中で働いた。仮の応変の処置である。それから二日ばかり経ち、川の兩岸の銘々の田圃を被うた砂礫を除去し、稲の株を助けねばならなかった。豪雨一過その爪跡は慘澹たるものであった。

附記

この短篇は、本年一月五日、一人で死んでいった宋世何の遺稿である。彼にはほかに短篇が二つある、「嫂の死」(『親和』一六六号)と「杜鵑の声」(『黒の手帖』一一号)である。いずれも彼の故国朝鮮を舞台にした佳品である、この「朔風」は未完成のようだが、彼の青年時代をおもわせるものがあり、日帝支配下の朝鮮農村の断面を、淡々と綴っている。この淡々さが、彼の作品の身上であり、魅力である。二月二十四日、福生の大行寺で営まれた追悼会の席で鄭哲が述べていたが、彼にとって創作は生涯の念願だったようだ。